

第8回計画（前半）元狭山バス停から箱根ヶ崎駅

步行距離 約 6.3 km

(後半) 拝島駅付近と上宿バス停から拝島大師バス停

步行距離 約 4.1 km

集 合 入間市駅南口 バス停 2番乗り場 午前9時

合計歩行距離 約 10.4km

第8回 元狭山バス停から箱根ヶ崎駅・・拝島駅付近・・上宿バス停から拝島大師バス停

実施日 2021（令和3）年11月17日（水）天候 晴

参加者 折本文雄、杉田 勝行、前北 勝司、中田 信義、中島 征雄 計 5名

コース 入間市駅バス停 9:00⇒9:21 元狭山バス停 9:24～二本木上宿道標～元狭山神社(9:36)～(10:01) 耕心館・瑞穂町郷土資料館けやき館～(10:11) 馬頭観音・征夷大将軍石柱～狭山池公園(10:26)・大常夜燈・馬頭観音～残堀川(10:42)～圓福寺～大橋～横田基地街道消滅地点～箱根ヶ崎駅(11:37)

箱根ヶ崎11:50⇒12:01 拝島 拝島駅～日光橋公園（昼食）～日光橋～拝島駅～共光稲荷神社～拝島駅『立川バス』バス停1番乗り場12:48⇒12:59 上宿バス停～奥多摩街道～地蔵尊（13:04）～拝島天神社～龍津寺（13:17）～普明寺～坂下地蔵尊（13:38）～大日堂仁王門～フジ棚～日吉神社（13:44）～拝島大日堂～おねいの井戸～拝島大師本覚院（13:53～59）～圓福寺～14:10 拝島大師バス停14:14⇒拝島駅

写真は、2019（R01）年5月23日・25日・30日、6月22日と当日のものを使用。



GPSデータ

步行距離：10.9km。 累計步行距離 73.8km。

全体所要時間：4時間22分。移動時間：2時間43分。停止時間：1時間11分。

移動平均速度： 3. 86km/h。全体平均速度：2. 40km/h。

今日の鉄道・バスを含む前行程の距離は19kmでした。

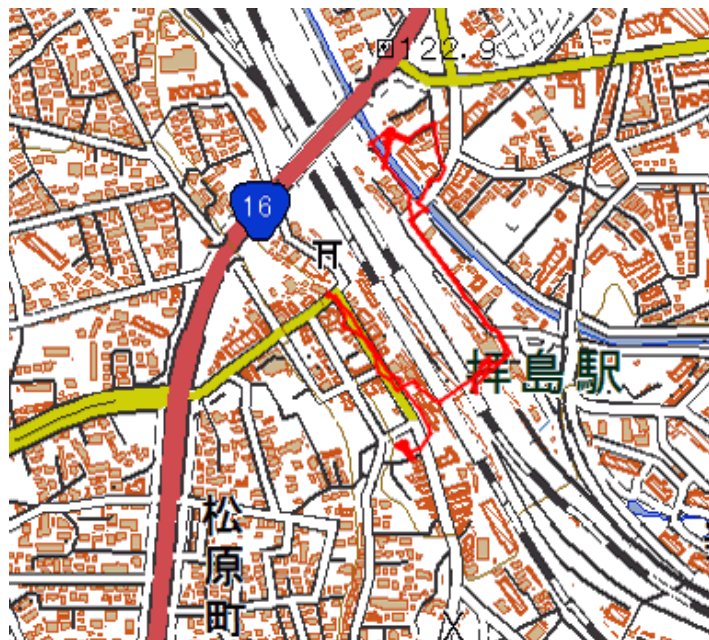
全行程



元狭山バス停から箱根ヶ崎駅



拝島駅周辺

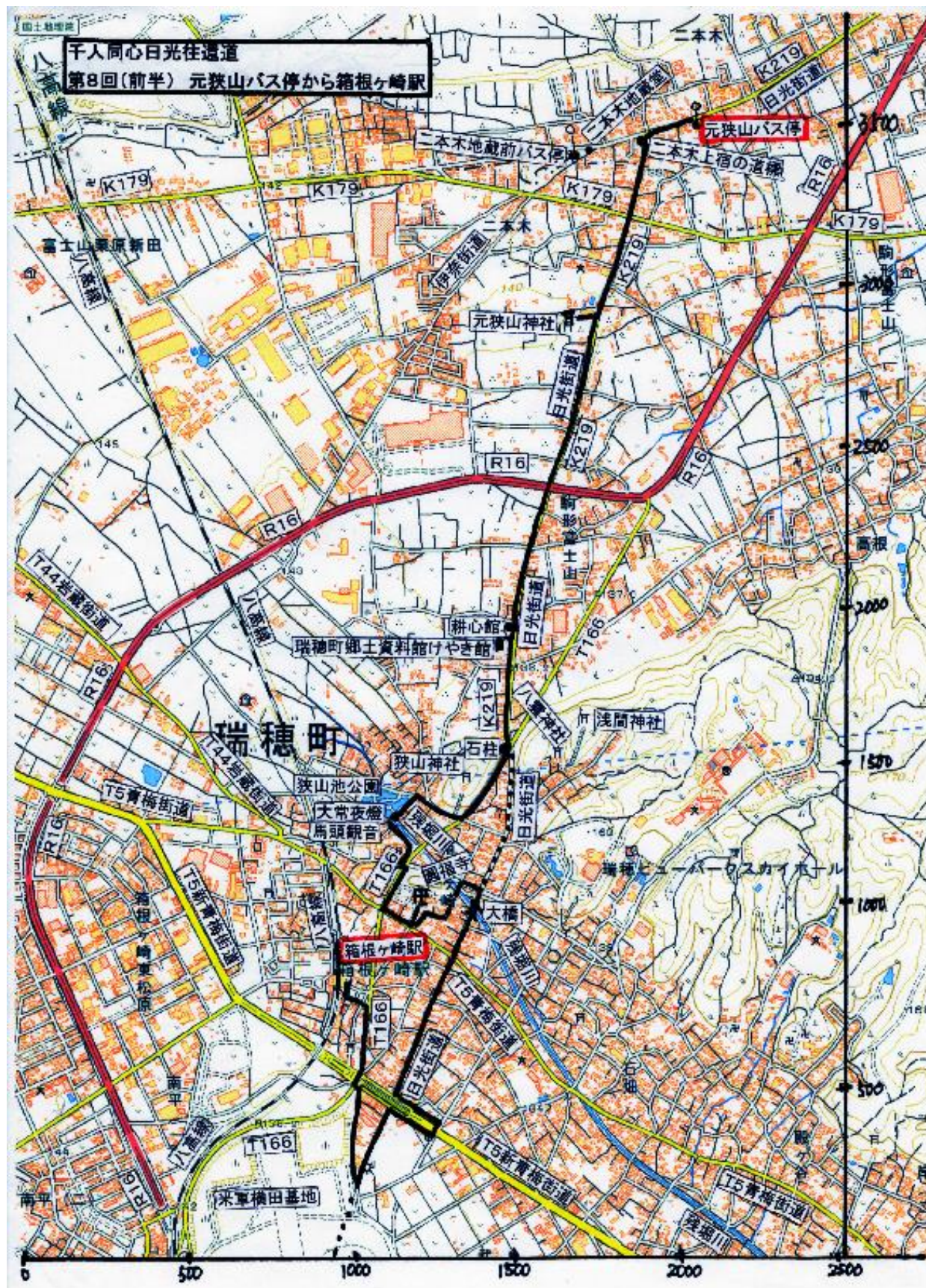


上宿バス停から拝島大師バス停



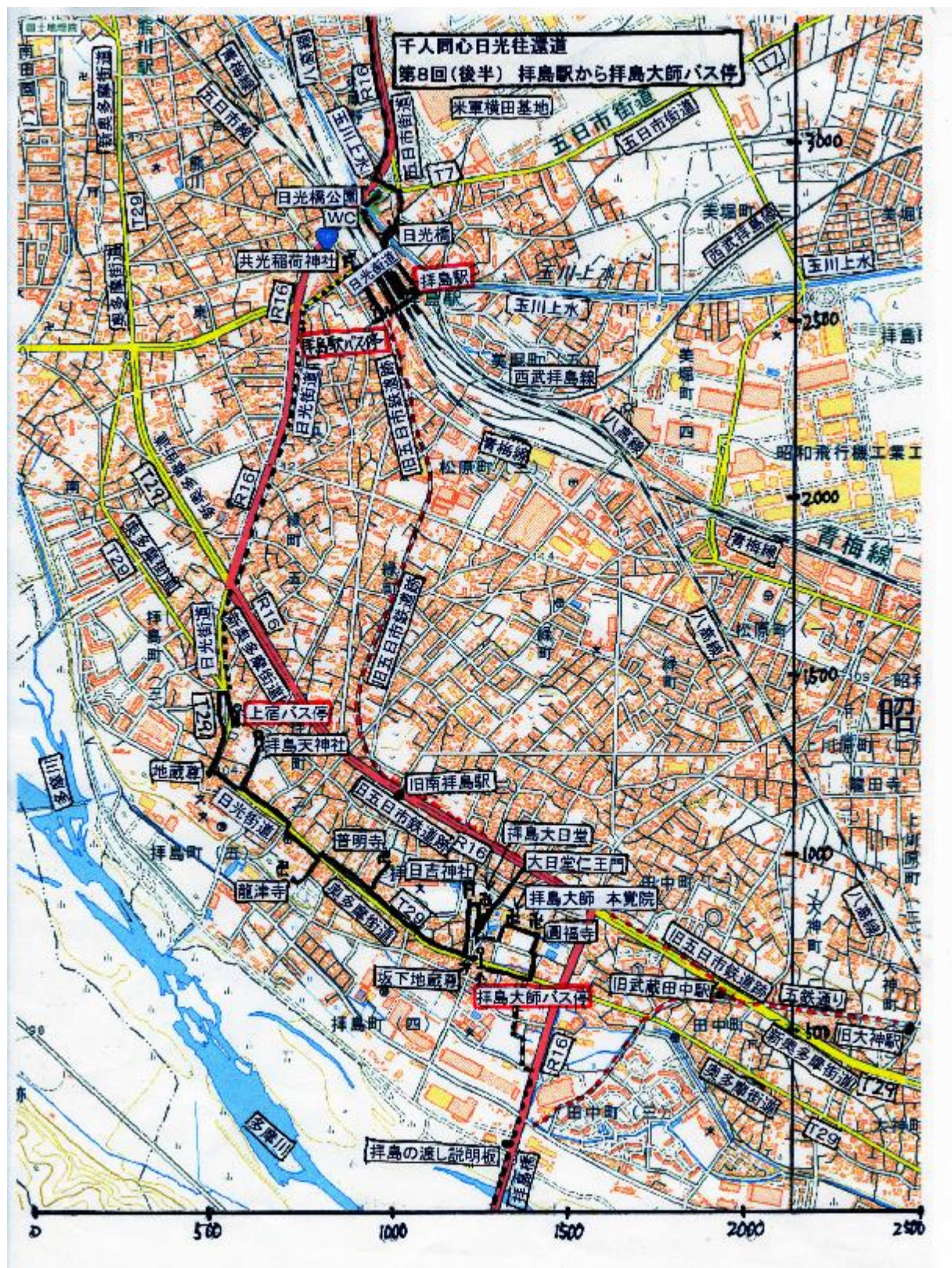
全行程図





- 元狹山バス停～箱根ヶ崎駅
歩行距離：6.5 km。所要時間：2時間29分。
- 箱根ヶ崎駅～J R八高線乗車で拝島駅
距離：6.1 km。

- 拝島駅～日光橋公園～共光稲荷神社～拝島駅バス停
歩行距離：1.6 km。所要時間：49分。
- 拝島駅バス停～バス乗車で上宿バス停
距離：2 km。



- 上宿バス停～拝島大師バス停
歩行距離：2.8 km。所要時間：1時間11分。

いわゆる小春日和。ウォーキングに最適な天気。入間市駅前のバス停に集合し、9時00発の二本木地蔵堂前行きのバスに乗る。



元狭山バス停で降り、二本木上宿の道標がある交差点を左折し県道219号線を進む。県道の左側30m、右側80m辺りで東京都瑞穂町に入る。



街道を進むと直ぐの右側に「元狭山神社」がある。(9 : 36 ~ 44)



元狭山神社

当社は、旧埼玉県入間郡元狭山村の四つの地区にあった四社を移転合祀した社。

- 駒形町鎮座 駒形神社 ○高根町鎮座 高根神社 ○駒形富士山町鎮座 八雲神社
○富士山栗原新田鎮座 子安神社

大正七年四月十五日に移転合祀し、社号を元狭山神社と改めた。

元狭山地区(駒形・高根・富士山・栗原新田・二本木・松山)を守護する氏神として人々の篤い信仰を受け現在に至る。



境内参道脇に馴染みの名前を発見



日光街道（県道219号線）を500m強進み、富士山交差点の東京環状（国道16号線）を横切る。歩道橋の下に「町の発展を誘う新たな道 一般国道16号瑞穂バイパス」の説明板がある。



450m程進んだ右側に「耕心館」がある。（10：01）



耕心館

周囲に塀をめぐる豪壮な母屋と二棟の蔵から成るこの邸宅は屋敷林の囲まれ、武蔵野の旧家のたたずまいを示しています。多種の草花が植えられ管理された庭(サラシナショウマが咲いていた)がある。

当地の豪農で醤油醸造業を営んでいた細川家を買収し社会教育施設としたもの。



隣に「瑞穂町郷土資料館けやき館」がある。資料館の前庭に「従是東南尾張殿鷹場」の境杭の複製がある。



日光街道を310m程進むと県道166号線と狭山神社下交差点で交差する。(10:16)



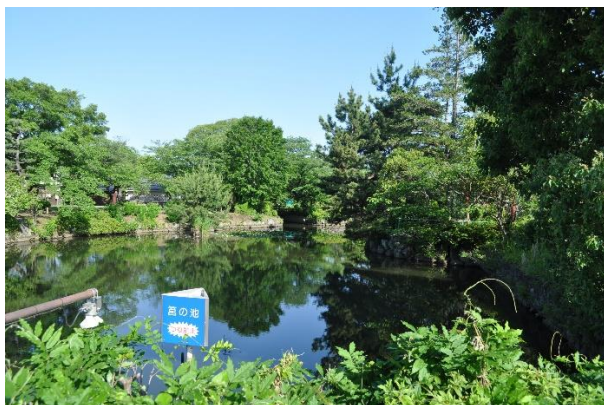
交差点の右側に「馬頭観世音」と「征夷大將軍口口」（坂上田村麻呂のことか）の石柱がある。



《狭山神社交差点を左に、県道166号線を渡り、坂道を登って行く道が日光街道であるが、大常夜燈がある狭山池公園に向かうため、右の県道166号線を進む。》



次の信号交差点を右折し飯能街道に入る。狭山神社の参道下から90m程で右に飯能街道を分け、左の道を50m程進むと左手に狭山池公園があるので左折。（10：16）「狭山池」の説明板、「常夜燈」がある。



狭山池

この辺一帯は、古多摩川が流れていた頃、深くえぐられ窪地になった所である。大雨が降ると周辺の

水が集まり、丸池を中心とした約十八ヘクタールは水びたしになり粘土質のため、水はけが悪く耕作できず、芝地になっていた。

鎌倉時代の歌集八雲御抄に「宮の池、武蔵国」とあり、同時代の夫木集（ふぼくしゅう）に

冬深み 宮の池辺を朝行けば

氷の鏡 見ぬ人ぞなき

と詠まれ、古くから世に知られた池であった。

農耕不適の広い芝原は、天明の打ちこわしの集合場所や、幕末の農兵訓練の場所ともなった。

江戸時代のはじめ狭山丘陵から流れ出す残堀川に狭山池の水を流し、玉川上水の助水とした。その後、文化四年(1807)に大がかりな池さらいをした記録がある。そのため池の水位が下がり現在の規模となった。

蛇喰次右衛門の伝説もこのような事情から生まれたものであろう。

明治から昭和にかけて芝地の大部分は農民に払い下げられたがのこった池及びその周辺(約1～2ヘクタール)は、昭和二十六年に都立狭山自然公園にしていされた。(後略)

昭和六十一年三月 瑞穂町教育委員会 瑞穂町文化財保護審議委員会

常夜燈

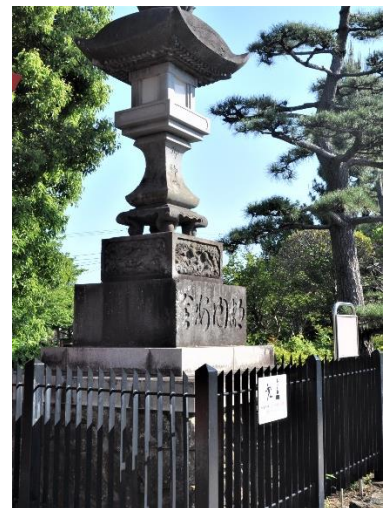
この常夜燈は慶応元年(1865年)に日光街道と残堀川が交わる地点にかけられた石橋のたもと(村野家わき)に建てられたもので、引又(埼玉県志木市)の石工弥十良の作という。

この頃は、狭山池周辺で農兵の訓練があり百姓一揆が押し寄せるなど不安の多い時代だった。また幕末のあわただしさを反映して人馬の通行も多かった。このような状況の中で、燈明をともし、通行人の道しるべにするとともに、天下泰平、村内安全を祈ったものである。

総高約五メートルで、台座には有名な中国の故事などの豊かな彫刻があり、近村でも珍しい大燈籠であった。

その後、関東大震災で倒壊したため、狭山神社境内に置かれ、昭和六十一年狭山池公園の整備に際し、火袋破損箇所を修復し、現在地に再建した。

昭和六十一年三月 瑞穂町教育委員会 瑞穂町文化財保護審議委員会





公園の南東角に「馬頭観世音」の石塔がある。また、その先に「蛇喰い次右衛門由来碑」がある。



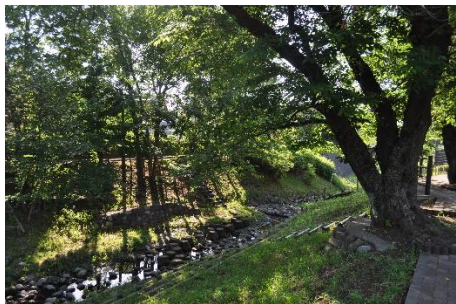
伝承「蛇喰い次右衛門」(瑞穂町石碑より)

蛇喰い次右衛門

昔、狭山池は「筥ノ池」と呼ばれ、18町歩（17.8ヘクタール）もある大きな池でした。とても暑いある日、百姓の次右衛門が「筥ノ池」で水浴びをしました。すると小さな蛇が絡みついてきました。必死で放そうとしますが、さらに体を締め付けてきます。力持ちの次右衛門はその蛇をつかみ噛みつきました。とたんに空は大荒れとなり、小さな蛇が大蛇となり、傷口からは血が七日七夜流れ続けました。退治された蛇とともに池の水は涸れ、小さな池となりました。その時の水の流れが、さながら大蛇のようであった様子から「蛇堀川」と呼ばれ、後に「残堀川」となりました。このおはなしは、狭山池（筥ノ池）から残堀川へ堀をつなぎ、池の水を玉川上水の助水としたことを反映して生まれました。

残堀川は、狭山池を源流に立川断層に沿って南東に流れ、旧日産工に突き当たって南下。ここからは人工の流路で、立川市柴崎町で多摩川に合流する。延長14.5kmの川。





10:42、狭山池公園の南東から残堀川に沿って下り、道なりにカーブして進むと県道166号線に出るので信号を渡り、右折して県道を進み、次の箱根ヶ崎交差点を左折。青梅街道を90m程行くと「圓福寺」の山門がある。(10:49)



圓福寺

当山は臨済宗建長寺派に属し、山号を北小山（ほっこさん）、寺名を圓福寺と号している。本尊は薬師瑠璃光如来（恵心僧都・作）。脇侍と十二神将とからなり厨子に安置されている。

天正元年（1573年）、当地の豪族村上土佐守義光が梅室慶香禅師を開山として創建した。当寺は創建当初は石畑にあったようで、その後幾度かの火災、復興を繰り返しながら、江戸時代には幕府の保護を受け、朱印も十石頂いている。



仁王門





圓福寺を出、左へ10m程で左への道を入る。道なりに右、左と曲がって進み、残堀川を渡って、狭山丘陵通りを右折すると狭山神社下交差点で分かれた日光街道に出るので右折する。(10:59)
40m程で「残堀川」を「大橋」で渡る。橋の右の欄干に「常夜燈」についての説明板がある。残堀川は立川断層に沿って南東に流れている。



常夜燈

日光街道大橋場脇に常夜燈が建てられたのは、慶応元年(1865)でありました。近村でも珍しい大燈籠で、通行人への道標となっていました。

大正十二年(1923)関東大震災のときに倒壊し、現在は狭山池公園に再建されています。(後略)



日光街道を進み、旧日光街道交差点で青梅街道を横切り直進。130m程の右側に交番がある交差点で江戸街道を横ぎり、ここから約320m程で新青梅街道に突き当たる。



日光街道は直進して続くのだが、新青梅街道に遮られるので左折し、瑞穂町役場入口交差点で新青梅

街道を渡り右折して、先ほど途切れた日光街道に戻る。



250m程進むと街道は米軍横田基地遮られて消滅する。



《ここから街道は拝島駅近くの日光橋まで横田基地の脇の国道を只淡々と歩くのみなので、八高線を利用して省略するので、箱根ヶ崎駅へ戻る。》

右の道に戻るように進み、新青梅街道を横断する。都道166号線を200m程進んだ交差点を左折すると箱根ヶ崎駅がある。(11:37)

箱根ヶ崎発11:50の八高線で拝島駅に行き(12:01着)、拝島駅北口に出で左折。線路に沿って進むと跨線橋の手前右側にトイレがあり、その先、玉川上水を渡ったところに日光橋公園があるので昼食とする。(12:06~23)



公園から北側の五日市街道に出て武蔵野橋北交差点を右折して日光街道を右カーブして進むと「玉川上水」に架かる「日光橋」がある。(12:26)



武蔵野橋北交差点から日光橋を通る道路は、昭和40年武蔵野橋ができるまでは国道16号線であった。

この日光橋は、それまで市内を走る大動脈を支える重要な橋であった。



街道は直進し、ＪＲの線路を渡るが、線路に遮られるので、左折して拝島駅の中の南北通路で渡ることとなる。



拝島駅南口の右の道を線路に沿って進むと、日光橋から来る旧国道16号線にぶつかる。目前に明治三十九年(1906)に創建された「共光稲荷神社」がある。ここから日光街道は消滅し、国道16号線を淡々と歩くこととなる。そこで、拝島駅から上宿までバスに乗ることにする。

拝島駅バス停1番乗り場発12:48立川駅北口行のバスに乗る。



上宿バス停で降り(12:59)、70m程戻り、横断歩道で左側に渡る。渡って左折し、旧道を進む

と120m程で奥多摩街道に合流する。合流点から100m強で左へ急角度で曲がる。

ここは拝島宿の西の端で鍵の手（杵形）であり、宿場内を守る「地藏尊」が祀られている。（13：04）



御地藏尊由緒

このお地藏様は、江戸時代初めの慶安年間に八王子千人同心が日光廟勤番に赴くために整備された日光往還道の宿場町として「拝島宿」が成立してまもなくの天和二年(1682)から鎮座していました。

お地藏様が東を向いているのは、坂下、「旧拝島町1番地」に鎮座するお地藏様と向き合い一対となって拝島宿の東と西の両端から宿場内を見守るために建立されたと伝えられております。

昭和二十年代初め道路整備時に破壊され台座のみが残っていましたが今般地元行講中により再建されました。
平成二十六年（2014年）五月 上宿講中

お地藏様から約100mの左の道に入って90m程に「拝島天神社」がある。（13：07）



拝島天神社

祭神は菅原道真公。文禄年間(1592～96)に谷保天満宮（国立市）から分霊されたと伝えられる。拝島宿が形成された頃からの古い由緒を持つ神社である。 拝島市教育委員会

街道を290m程進んだ右の龍津寺惣門の奥に「龍津寺」本堂がある。（13：17）山門は「中寂門」といい、文久三年(1863)六月廿六日建立。



龍津寺（りゅうしんじ）

龍津寺は、山号を玉應山といい、曹洞宗の寺。本尊は釈迦牟尼仏、脇立は、文殊菩薩、普賢菩薩。青

梅天寧寺四世・説翁星訓禅師が開山、義徹宗廓居士（花房主計頭）が開基となり、天文年間（1532～55）に創建。天正十九年（1591）には徳川家康より寺領10石の御朱印を拝領していたといひます。

驚くほど大きな本堂の天井板絵55面及び杉戸絵16面は市指定有形文化財である。



龍津寺惣門から170m位の右手に、立派な門と塀、蔵のあるお屋敷がある。



その向かいに「普明寺」と寺号が彫られた石柱がある。その参道を80m程入った奥に「普明寺」がある。（13：32）





普明寺（ふみょうじ）

普明寺は、山号を拝島山といい、天台宗の寺。本尊は、大日如来像。創建は、天正年間(1573~91)の初期に滝山城主北条氏輝の家臣石川土佐守が大日堂を再建した時に、大日八坊といわれる普明寺を含む八ヶ寺を建立したことが「新編武蔵風土記稿」に記されている。

天正十九年(1591)に徳川家康から大日堂が堂領10石の御朱印を賜ったが、普明寺は別当寺として、その内5石を配当されたと言われた大日八坊の中でも由緒ある寺院である。

普明寺を出て、奥多摩街道を進む。途中、拝島駐在所前を通り、340m程の拝島大師前交差点の20m程手前左に小橋を渡る日吉神社の参道があり、神社名が彫られた石柱と鳥居がある。日吉神社本殿は参道入口から約150m奥に鎮座している。街道の拝島大師前交差点の左前角に「坂下地蔵尊」が祀られている。



坂下地蔵尊

このお地蔵様は、江戸時代初めの慶安年間に八王子千人同心が日光廟勤番に赴くために整備された日光往還道の宿場町として「拝島宿」が成立してまもなくの天和二年（1682年）から鎮座しています。西を向いているのは、上宿の大曲りに鎮座するお地蔵様と向き合い一対となって拝島宿の東と西の両端から宿場内を見守るために建立されたと伝えられ、明治十七年の坂下大火と大正六年の下宿大火の際に、このお地蔵様は町や人々を守るため、火消しに空を飛び回ったという言い伝えが残っています。

昭和三十年代の道路整備で現在地に移動しましたがその昔は路上の傍らにあって、往来する人々は宿場のはずれであることを知り道中の安全を祈願したことでしょう。

建立三百三十年 平成壬辰二十四年十一月

坂下地蔵番

左手前角には「大日堂」と彫られた石柱があり、ここからが大日堂の参道である。



参道の先に「大日堂仁王門」がある。



市指定有形文化財 大日堂仁王門

仁王門の創建年代は明らかではありませんが、門の掲額「密厳浄土寺」の書は由緒あるものである。これを蜀山人は、『調布日記』の中で「宮方の書にや いずれも高貴なる人の書なるべし」と記している。

仁王門は間口9メートル、奥行6.3メートルあり、門内には都指定有形文化財の金剛力士像が安置されている。 平成十四年一月 昭島市教育委員会

仁王門の左手・拝島公園の広場の左側（西側）に樹齢800年の「拝島のフジ」がある。



東京都指定天然記念物 拝島のフジ

このフジは、推定樹齢約**800年**と言われ、都内有数のフジの巨木です。昭和三十一年の指定当時には根元の周囲が**2.9m**あったといわれています。

伝承によると、室町時代末頃、この地に建っていた明王院の境内に自生していたそうです。しかし、江戸時代初期にその明王院は廃寺となり、フジだけが残りに今に至ったと伝えられています。俗に「千歳のフジ」とも呼ばれています。(後略) 東京都教育委員会

フジ棚の左に鳥居をからの日吉神社の参道があり、参道は、鳥居から左右の燈籠の間を進む。



左に「志茂町屋台小屋」があり、この小屋に納められている屋台は、昭島市指定有形民俗文化財で、日吉神社例大祭で奉曳される単層唐破風屋型を持つ一本柱様式の人形屋台で、明治二十一年(1888)に建造されたものです。

参道の階段を上ると日吉神社の社殿がある。



日吉神社由緒

祭神 大山咋命(おおやまくいのみこと)、香山戸命(かがやまどのみこと)、羽山戸命(はやまどのみこと)の御三神で農業振興、除災招福の神様です。

創建 寛保元年(1741)、拝島山守護総鎮守として比叡山日吉神社より勧請。延暦寺から拝島山山王大権現の称号を賜わる。寛保より明和に至る二十六年の間、氏子一日一銭の醵金により神輿・祭礼具完備。 嘉永五年(1852)、現社殿を再建。明治二年、社号を日吉神社と改称、今に至る。

例祭 明和四年(1767)九月十九日申の日に第一回祭礼が行われ、以来、九月十九日を以て例祭日と定む。御輿の渡御、山車の巡行等ありて盛大を極む。

囃子 祭礼の奉納囃子は昭和四十年、昭島市無形文化財の指定を受く。

(後略) 昭和四十四年三月吉日 日吉神社

日吉神社本殿彫刻並びに拝殿格天井花鳥画七〇面・板壁絵二面及び幣殿杉戸絵四面は、昭島市指定有形文化財である。本社殿は安政二年(1855)に再建されたもの。



他、二つの解説版がある。

市指定無形民俗文化財 **拝島町日吉神社祭礼囃子** (ばやし)

日吉神社に伝わる祭礼囃子は、この神社が寛保元年(1741)山王大権現の称号を得たことを記念して、氏子一同が社殿の修理やみこしを造ることを計画し、当時の金額で一人一文の積み立てをはじめました。

明和四年(1767)になり、この計画が実現したので、みこしをかついで祭礼を行いました。その際、先頭にお囃子を乗せた山車があり、これが今に伝えられる祭礼囃子のはじまりです。現在では、十松・神田・目黒の三種類のお囃子がそれぞれの町内の人々によって传承されています。

平成十五年三月 昭島市教育委員会

注) 日吉神社に祭礼囃子は、加美町(上宿)は「十松囃子」で調子の荒い笛と大小の太鼓との「絡み」が難しい、奈賀町(中宿)は「神田囃子」で派手な調子、志茂町(下宿)は「目黒囃子」で素直で優しい調子と、それぞれ流派種類を異にしているとのこと。

“一度、この三囃子を聴き比べたいものだ。”

東京都指定史跡 **大日堂境域及び日吉神社境域**

大日堂の創建は、寺伝などによると天暦六年(953)と伝えられている。その後、戦国期、滝山城の築城に際し城の鬼門除けとして現在地に移され、天正年間(1573~91)には滝山城主北条氏照の重臣石川土佐守が娘の眼病を祈願し平癒により堂宇を再建。この時に「大日八坊」といわれた一山八ヶ寺が建立されたと言う。

天正十九年(1591)には徳川氏より朱印地一〇石を下賜され、享保十七年(1732)には大日堂の位置を階段上の現在地に移し建物を再興している。

一方、日吉神社の創建は不明であるが、天正年間の大日堂再興の折にその守護社として建立されたと言われ、寛保元年(1741)に「山王大権現」の称号を許されている。

当該地は古刹として著名な大日堂と天台宗の守護社である日吉神社によって形成された境域で、歴史的建造物を中心に旧態をよく留め、典型的な天台宗一規一画の寺域を構成する都内でも数少ない場所の一つである。 平成五年三月三十一日 東京都教育委員会

日吉神社の隣に「拝島大日堂」がある。





昭島市史による 拝島大日堂の縁起

拝島大日堂は、拝島山密厳浄土寺と号し、天台宗の寺院。『大日堂縁起』などによれば、天暦六年(952)の多摩川洪水の際に中州に流れ着いた大日如来の木像を大神の浄土にあった浄土寺に安置していたが、滝山城築城の折にその鬼門除けとして、この地に移したと伝えられている。

創建の時代は不明であるが、『新編武蔵風土記稿』・『大日堂縁起』によれば、天正十九年(1591)に徳川家康より一〇石の御朱印を賜ったとしているから、比較的早い時代から存在が認められていたようである。また、『大日堂縁起』は北条氏照の家臣石川土佐守の娘於ねいの眼病を祈願し平癒したので、天正年間(1573~91)堂宇を再建し、外に八箇の寺院を建立したと記している。

この大日八坊については『新編武蔵風土記稿』によれば、普明寺、本覚院、圓福寺、智満寺、蓮住院、竜泉寺、明王院、密乗坊の八ヶ寺で、普明寺が別当であり堂領一〇石は普明寺が三石、残りの七坊が一石宛てと配当されていたと記している。現存しているのは普明寺、本覚院、圓福寺の三寺のもで、その他は廃寺となっている。

大日堂に遺る棟札によれば享保十七年(1732)に大再興が行われ、堂の位置を現在の地に移したようである。

現在の境内には薬師堂、地藏堂、六地藏堂、鐘楼、仁王門が遺されており、往時の隆盛をとどめている。

大日堂の本尊は大日如来の座像で、両脇に阿弥陀如来、釈迦如来が安置されている。三体ともに都重宝「彫刻」に指定されている。また、仁王門に金剛力士立像があり、二体とも都重宝「彫刻」に指定されている。

市指定有形文化財 大日堂

(前略) お堂は、間口14.7m、奥行13.7mあり、本尊は丈六の大日如来坐像で、釈迦・阿弥陀如来坐像とともに、都の有形文化財(彫刻)に指定されています。

昭島市教育委員会

大日堂から参道の階段を降りた左手に「おねいの井戸」がある。



市旧跡 おねいの井戸 昭和36年6月1日指定

この井戸は、拝島町にある有名な三つの井戸のひとつで、別名「お鉢の井戸」と呼ばれています。室町時代の末期（四百年余り前）滝山城主北条氏照の家臣であった石川土佐守が大日堂で娘「おねい」の眼病のなおることを祈り、さらにこの井戸の水で眼を洗ったところ、よくなったと言い伝えられています。

昭和49年3月 昭島市教育委員会

注）拝島の三井戸：「おねいの井戸」、「松原の井戸」松原町5丁目にあった井戸。今は無い「花井の井戸」 拝島町4-16-41の個人宅内。



大日堂境内の道路を挟んだ東側に「拝島大師」がある。



拝島大師本覚院は、法隆寺風の回廊で囲まれ、何か神秘的なものを感じさせる。



拝島大師

拝島大師は、**拝島山本覚院**と号し、天台宗の寺院。大日八坊の一つ。本尊は元三・慈恵大師良源御自作御自刻の大師像。元亀二年(1571)、織田信長が比叡山を焼打ちした時、敬謙(けいしん)大僧都により北叡横川から救出され、七年後天正六年(1578)、この地に安置し、本覚院を創建したと伝えられる。

元三・慈恵大師良源(延喜十二年九月三日〈912年10月15日〉～永観三年一月三日〈985年1月26日〉)は、平安時代の天台宗の僧。諡号は慈恵大師(慈恵大師)で、一般的な尊称は、**元三大師**(がんざんだいし)、角大師、豆大師、厄除け大師である。元三大師は、命日が正月の三日であることから。

角大師の図像には、

その①2本の角を持ち骨と皮とに瘦せさらばえた夜叉の像を表したもの。その②眉毛が角のように伸びたものの2種類があり、良源が夜叉の姿に化して疫病神を追い払った時の像であるという。

元三・慈恵大師良源は、第18代天台座主で、焼失した堂塔を再建、最澄の創建当初は小規模な堂であった根本中堂を壮大な堂として再建し、比叡山の伽藍の基礎を造った。伽藍の復興、天台教学の興隆、山内の規律の維持など、様々な功績から、延暦寺中興の祖と尊ばれている。弟子には、『往生要集』の著者・源信(恵心僧都)がいる。



南大門



南の奥多摩街道には拝島大師本覚院の背の高い「南大門」がある。そこから参道を進むと、「山門」

があり、楼上に文殊菩薩をお祀りする「**文殊楼**」で、本山比叡山延暦寺根本中堂の文殊様を勧請した竜宮城様式の建物である。



文殊楼



八角円堂・弁才天堂

山門文殊楼を潜った参道の参道の左手に「**八角円堂・弁天堂**」がある。奈良興福寺の北円堂・南円堂を思わせる壮大な木造八角円堂は関東随一である。中央に六臂の弁天像、左に毘沙門天、右に聖徳太子という天台独特の様式である。



西門・転害門と大師の池

この池は大師の池で、滋賀県の琵琶湖を模し、天台宗祖伝教大師最澄や元三大師・慈恵大師良源が信仰したのに倣ったもの。

山門文殊楼を潜った右手に「**経蔵・転法輪蔵**」がある。丈六の釈迦三尊を本尊とし、階上二階にぐるり一周する転法輪蔵を備える。



隣に五重塔



五重塔の北隣に大黒堂



大黒堂（旧本堂）

経蔵・転法輪蔵の横に「大黒堂（旧本堂）」がある。平成三年（1991）まで本堂であった。拝島大師は江戸時代の寛保二年（1742）の大火災で堂塔伽藍をすべて焼失。十九世紀初頭の文化（1804～17）の頃、義順和尚により多摩郡・武州は無論、相州・甲州の西関東一帯に勧進行脚して浄財を集めて建立したのが旧本堂である。文久三年（1863）には義勸和尚により向拝高廊が造営されましたが、その擬宝珠には寄進者中野久二郎（中久、昭島市中神町）や大塚徳左衛門（八王子市鎌水）らの著名な絹生糸商の豪農の名が刻まれている。

本尊は、表に大黒天らの福神、奥に薬師如来・日光・月光菩薩、十二神将が祀られている。



本堂前、左手に「大梵鐘・ちぶさの鐘」がある。一尺五寸(45cm)のケヤキ柱6本のその内に808貫(3トン)、直径四尺三寸(1m40cm)の大梵鐘。昭和五三年完成。比叡山上の御大師様(良源)が山麓の母を慕う気持ちに因み、「ちぶさの鐘」と名付けた。

ちぶさの鐘建立趣旨には、「ちぶさの鐘とは、大師(元三・慈恵大師良源)が大変親思いで、滋賀県長浜に居た病後の母(月子姫)を心痛し、大師が住む叡山横川の峰の真下の千野に庵室を設け、母子の情を通わせたという故事に因む」とある。



本堂・元三大師中堂

平成六年(1994)五月に、12年掛けて創建された。比叡山根本中堂と旧国宝大講堂を合体させた桃山様式建築を復元した建物。本尊は元三・慈恵大師良源御自作御自刻の大師像。

本堂の奥、築山に「奥の院・多宝塔」がある。中に御大師様の御本体である如意輪観音が祀られている。



多宝塔

西門・転害門

拝島大師の最西端に西門・転害門がある。奈良東大寺の現存最古の西門を倣って転害門と名付けた。

本堂と大黒堂の間の道を東へ約90m進んだ左手に「圓福寺」がある。



圓福寺

圓福寺は、天正元年(1573)に大日八坊の一寺として再建された天台宗の寺院。開基は北条氏照の家臣石川土佐守。石川土佐守は拝島、羽村、久保（八王子市久保山町辺りか）、天間（あきる野市雨間か）、高築（八王子市高月町か）の領主。『新編武蔵風土記稿』によると「客殿三間に七間南向、本尊は聖観音を安置す。開山詳ならず。大日領一石の配当、廃寺の蓮住院の寺務を摂行し、都合二石をおさむといへり」とある。本尊は「聖観音」となっていますが、現在当寺に安置されているのは「阿弥陀如来像」です。



圓福寺から南へ向かう道を進み、奥多摩街道を右折。130m程、拝島大師南大門の斜め西に拝島大師バス停がある。今日はここまで。ここから拝島駅へ14時14分発のバスで向かう。